

72

天理図書館所蔵の明刊本『素問糾略』について

長野 仁

神戸大学大学院医学研究科ゲノム医療実践講座

1. 【緒言】

金元四大家の一人である朱丹溪(1282~1358)は、「陽有余陰不足」を唱えて「養陰派」と呼ばれる。『格致余論』『局方發揮』等が代表作で、後人の手による『金匱鉤玄』『丹溪心法』等も著名である。丹溪の医説は現代中医学にも影響力を持ち、『丹溪医集』(人民衛生出版社、1993刊)、『朱丹溪医学全書』(中国中医薬出版社、2006刊)といった著作集も編まれている。ところが、わが国には著作集に収録されず、『丹溪学研究』(劉時覚等編、中医古籍出版社、2004刊)では多紀元胤の『医籍考』を援引して「待考諸書」の1書に挙げながら「恐已佚」と結んでいる『素問糾略』が現存する。天理大学附属天理図書館所蔵の明刊本(以下、刊と略称)について、東京大学総合図書館の模写本(以下、写と略称)で補足しつつ報告する(『中国中医古籍総目』は『素問糾略全集』[1911抄本、中国科学院上海生命科学信息中心生命科学図書館所蔵]を著録するが、[著者佚名]とあり同本か別本かは判別不能。演者未見)。

2. 【書誌】

函架番号:490-イ59。納戸色表紙、改装、六針眼訂法、康熙綴(袋綴)、原寸:縦26.0㎝×横15.5㎝、四周双辺、版心黒口、上魚尾、書名等なく丁付のみ。有界9行18字、小双行あり。不分巻6冊、1冊:「刊『素問糾略』序」存2葉半、目録1葉、本文第1~26葉、2冊:第27~55葉、3冊:第56~79葉、4冊:第80~104葉、5冊:第105~132葉、6冊:第133~158葉(以下2葉落丁)。

写の序文は全4葉あり、第3葉裏~4葉表に「大明弘治壬子秋九月吉日 吏部郎中 琴川 周木 序」とある。また、刊の本文第1葉表は「金華 朱震亨 彦修 纂」に次ぐ「琴川 周木 近仁 校正」の一行が刳り貫かれ白紙で裏打されると分かる。これにより、『素問糾略』は弘治5年(1492)に周木が校正し序文を認めて刊行したものと考えられる。

刊は昭和28年(1953)に天理教会本部が天理図書館へ寄贈、昭和41年(1966)に整理、平成10年(1998)に目録へ著録されたものだが、「天理図書館蔵」を除く「甫孝」「愚齋鑑藏」「愚齋審定善本」「愚齋図書館蔵」「武進盛氏書藏」の蔵書印から、清末の実業家で日本に亡命経験のある盛宣懐(1844~1916)の旧蔵書と分かる。彼は宣統2年(1910)、日本の帝国図書館に倣って上海に愚齋図書館を設立したことで知られる。刊の第1冊表紙にみられる「丙辰年看過」の朱印は修補年を示すが、これは盛彼の没した民国5年にあたる。のち、七男の盛昇頤によって約200冊が寄贈された。医書では、このほか嘉靖期刊『医壘元戎』、明刊『黄帝素問靈枢集註』、明刊『素問運氣図括定局立成』、明刊『新刊素問入式運氣論奥』附『素問遺篇』、明刊『新刊補註釈文黄帝内経素問』、明刊『神隠』存巻下の計8書目32冊分が同館に帰している。

3. 【小結】

朱丹溪は、30歳で母の腹痛を治すべく3年間『素問』を学習し、40歳で医の道に転じ、医学は『和劑局方』ではなく『素問』『難経』の諸経に基づくべきと痛感した。いわば『素問』研究は丹溪の医説の出発点である。その研究成果と目され、佚存書と考えられる『素問糾略』は、天地陰陽四時略・運氣略・形体蔵府性情略・疾病略・経遂略・診察略・平治略・湯液醪醴薬食気味略・調撰略の9篇からなり、現代の中医学基礎と見紛う構成を持ち、周木は「医人不読『素問』、猶士人不治本経」と序す。丹溪の医説を考究する上にも、丹溪の医書を享受して発展した近世日本の医学を分析する上にも、『素問糾略』の内容検討は急務といえる。

※本研究は、平成20~22年度・科学研究費・基盤(C)「漢方腹診書・鍼灸流儀書に関する書誌研究」(課題番号:20520580)による。